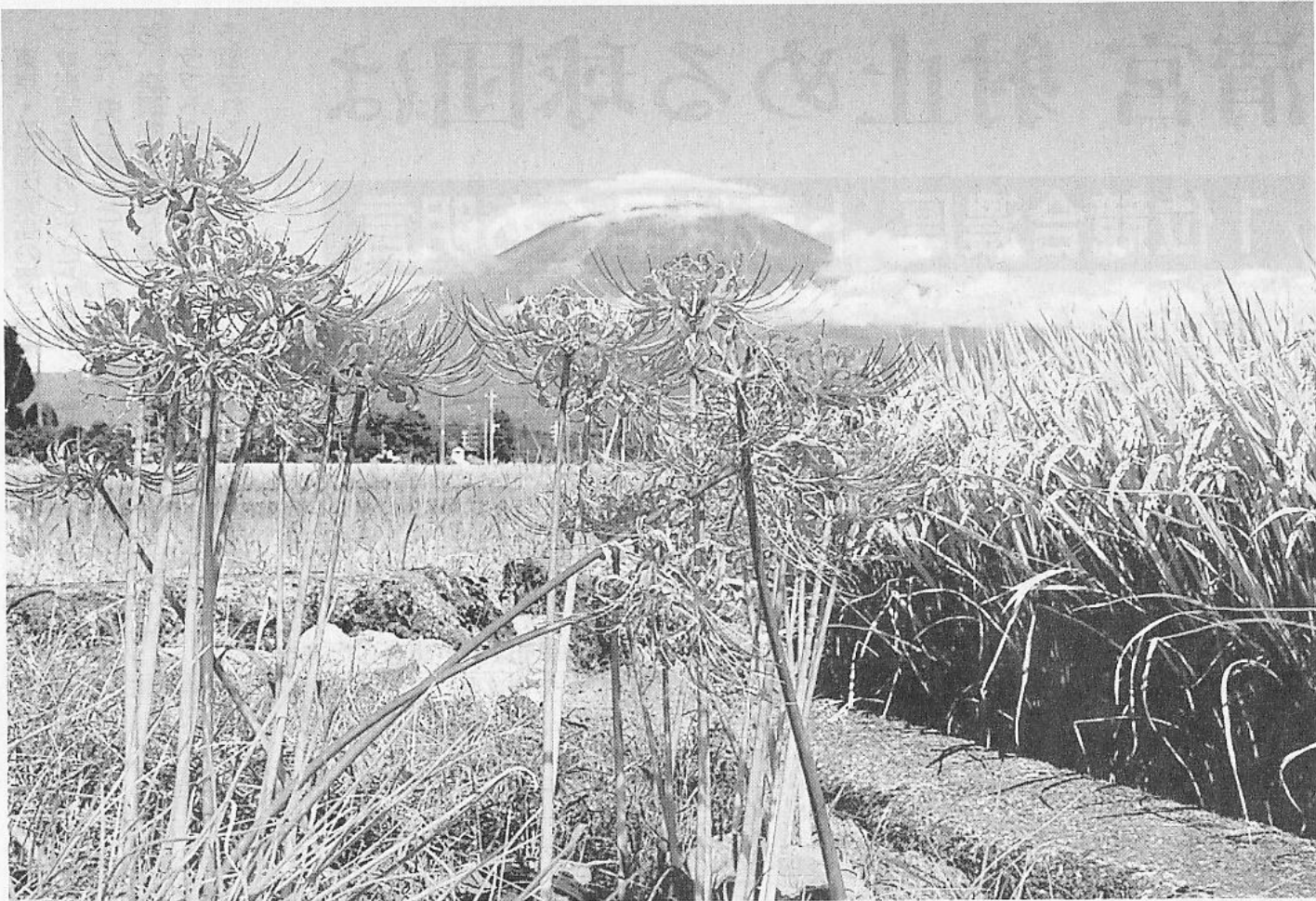


秋訪れてがん検診

季節を象徴する花がある。「彼岸花」は、その名の通り秋の彼岸を告げる代表的な花だろう。薄緑の伸びやかな茎の先端で、華やかに咲き乱れる赤い花を見て、人はしみじみと秋の到来を知る。

初秋の9月が「がん征圧月間」であることは、あまり知られていない。がんは、今や日本人の生涯で2人に1人が罹患すると推定されている「国民病」である。国も2006年に「がん対策基本法」を制定し

て、予防と治療の両面からがん対策に取り組んでいる。



秋を告げる彼岸花＝富士宮市、全日写連薩川高宏さん撮影

私たちが暮らしの中でできる「がん対策」がある。がんにかかりにくいとされる生活習慣を励行すること、がんを早く見つけるため「がん検診」を受けることである。「がん征圧月間」は、こうした民間のがん予防を推進するため「日本対がん協会」（会長・垣添忠生元国立がんセンター総長）が提唱し、毎年9月に全国的にがん予防を呼び掛ける催しが展開されている。

県疾病対策課によれば、本県のがん検診受診率（2016年）は胃がん42・6%、肺がん52・4%、大腸がん43・5%、乳がん45・2%、子宮頸がん43・2%。肺がん以外は検診対象者の半数にも達していない。かつては「死の病」だったがんは、今では「早期発見・早期治療」でかなり克服が可能になった。

大型台風が接近中だった16日、今年も静岡県対がん協会による啓発イベントが静岡市であった。がん専門医による講演とタレントのがん克服体験談に、400席の会場はほぼ満席だった。せめてこの半数の200人が、がん検診を受けてほしいと主催者はつぶやいていた。

今年も彼岸花が野辺を飾る季節になった。どこか寂しさも漂うこの花をみて、しばらく受診しなかった「がん検診」を受けることにした。

（前静岡県監査委員・
富永久雄）